論 文

東日本大震災で被災した地域スポーツクラブの連携を通じた復興プロセス
――某ママさんバレーボールクラブのレジリエンス――

The Reviving Process of a Local Sport Club Damaged in the Great East Japan Earthquake through Partnership with Other Local Sport Clubs: The Resillience of a Ladies Volleyball Club

吉田 毅

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

（2020年3月14日　受理）

Ⅰ．はじめに

1. 問題の背景と本稿の目的

東日本大震災（2011年3月11日に発生；以下「3.11」と記す）から9年が経過した。各研究領域で3.11をめぐる様々な議論が蓄積され、一定の成果が得られるべき時期とみてよいだろうが[1)]、スポーツ社会学においては従来、そうした議論は低調であったと言わざるを得ない。3.11の風化が否応なく進む昨今、被災地ではそれを防止するために語り部等による3.11の伝承活動が活発化している[2)]。他方で、震災について議論する松井が指摘する通り、社会学の視座から研究に携わる「私たちにできることは限られて」いるのであり「被災の経験を記録し伝達すること」（松井，2008，6）に他ならない。蓋しスポーツ社会学においても、3.11の風化防止はもとより災害復興や防災減災の手がかりとなる知見を得るべく、3.11で起こったスポーツ界の現実をめぐって研究を蓄積し、後世に伝えていくことが重要であるに違いない[3)]。

3.11以後、メディア等では被災地の復興をめぐってスポーツの力が盛んに言及されるようになった。そうした中、スポーツ科学領域では当初から、スポーツ関係者による物資支援や被災地訪問等の、言わば復興支援力に着目した研究（藤本・犬飼，2012；加藤，2012；黒須，2011；中村，2016；齋藤・中村，2012）が活発化した。それに対し、甚大な被害を受け苦境に立たされた被災地、そこにおけるスポーツ界それ自体の力である「レジリエンス」（「回復力」「強靭性」）については看過される面があった（吉田，2016）。3.11を契機に災害をめぐるレジリエンスが様々な方面で重視され、そのあり方が盛んに議論されてきたにも拘わらずである。

レジリエンスはもとより物理学用語であるが、かつては主に心理学で盛んに検討に供され（齊藤・岡安，2009）、特に3.11以後は災害との関連から様々な領域で着目されるようになった。日本学術会議は、レジリエンスについて「想定を超える極端現象に遭遇してもできるだけ平常の営みを損なわない、また仮に被害が避けられない場合でもそれを極力抑え、さらには被害を乗り越え復活する力」と

Yoshida Takeshi: Professor, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama

具体化し、3.11 は「社会・経済システムのレジリエンスのみならず、人の精神的側面をも含む包括的な観点から災害に対するレジリエンスを捉え、その向上を追求することが必要だということを示した」（日本学術会議，2014，1）と指摘する。特に 3.11 以後も大災害が頻発しているわが国では、防災減災や災害復興の観点からスポーツ界のレジリエンス向上に関する議論を活発化していくことも重要と言えよう。

筆者は 3.11 以後、社会学の視座からそのための手がかりを得ることを意図し、人的被害が最も大きかった宮城県、特に沿岸部が壊滅的被害に遭ったＢ町スポーツ界の被災と復興の様相をめぐるフィールドワークに取り組んできた。その成果として、被災したＢ町の地域スポーツクラブの復興プロセスにおけるレジリエンスの様相（源泉、要因）に関する論考を著した（吉田，2016，2017）。まず、某総合型地域スポーツクラブにおいては、主としてマネジャーが抱いた「子ども愛」、ならびに子どものスポーツ活動で被災地を元気づけたいといった「地域愛」がスタッフに共有され「レジリエンスの源泉になった」との知見が得られた（吉田，2016）。また、2 つのスポーツ少年団においては「主軸を担う指導スタッフが抱いた子ども愛に加え、地域愛ないしクラブ愛といった活動再開ばかりかその後の活動をもおし進める類の心情が各スポ少のレジリエンスの要因」と捉えられた（吉田，2017）。

しかしながら、いずれのクラブもマネジャーあるいは指導者が運営するタイプであり、そうした固有性が各クラブのレジリエンスにも反映されたのではないかと考えられる。むろん地域スポーツクラブにはこれらと異なるタイプもある。その代表的な存在として挙げられるのが、わが国の伝統的なタイプとも言うべき成人有志で構成される単一種目型クラブである。この種のクラブは、わが国で課題とされて久しい生涯スポーツ社会の実現のためにも重要な存在と言えよう。本稿では地域スポーツクラブのレジリエンスについて新たな知見を得るために、単一種目型クラブの復興プロセスに着目する。それにあたり、上記フィールドワークで対象としたママさんバレーボール（家庭婦人バレーボール）のＬクラブを取り上げる。なぜなら、Ｌクラブの復興に至る様相は、上記論考の対象クラブとは異なる面があり、地域スポーツクラブのレジリエンス向上について考えるのに有用とみられるからである。本稿は、3.11 で被災したＬクラブの復興プロセス、とりわけＬクラブがレジリエンスを発揮し得た要因（なぜレジリエンスを発揮し得たのか）について解明することを目的とする。

2. Ｂ町について

次に、Ｂ町の概要と 3.11 をめぐる様相について、主に先行研究（吉田，2016）から引用する形で示そう。

Ｂ町は「宮城県沿岸部に位置し、古くから水産業が盛んである一方、今日は周辺都市のベッドタウンの様相も呈している。町内は起伏に富み、高台の中央地区に町役場、小・中学校、公民館、総合運動場（仮称）等がある。少し下った地区ともうひとつの高台地区にも小学校ないし中学校がある。海沿いの平地には漁港等の水産業施設を有する地区が隣接し、各地区に公民分館が設置されている」。3.11 におけるＢ町の被災状況としては「海沿いの平地」が「10 m を超える大津波に襲われ」て「壊滅的被害を受けた」。それにより「町内全域でライフラインは寸断された。死者・行方不明者は 100 人程、建物被害は全壊 700 件程を含め 4000 件程に達した」（吉田，2016，536–537）。

3.11 以後についてみると「4 月中旬にはライフラインの復旧」が進んだことで、住民の生活はだいぶ落ち着きを取り戻し「小・中学校で新年度がはじまった」。3.11 から 3 ヶ月程経った「6 月上旬には町内 7 ヶ所の仮設住宅 400 戸程が完成し、中旬には避難所はすべて閉鎖された」（吉田，2016，537）。それと

同時に、主として仮設住宅の入居者に対する被災者支援サポートセンターが設置された。当センターは、災害公営住宅の建設が進んだ2016年度に活動を終えた。災害公営住宅は、沿岸の高台に長屋型と3階以下の低層型とが建設され、それらが完成した2017年3月にはプレハブ仮設住宅が全て取り壊された（地星社，2019）。

人口の動向は「2万1千人台であった2005年をピークに減少に転じ、2011年には2万人台となった」。3.11以後は沿岸部に居住することはできなくなり「町を離れる人」が相次いだ。そのため、翌年（2012年）には「600人あまり減少し、2013年には2万人を下回った。その後も年々300人程減少」が続いた（吉田，2016，536-537）。

Ⅱ．方法

本稿の方法は基本的に、Ｌクラブの複数のメンバーと、その復興に直接に関わった周辺クラブのリーダーに対する個別的な聞き取り調査である。調査を実施する前に、Ｌクラブが結成された翌年に加入し、それ以降はサブリーダー的存在（2008年までプレー継続）であり、調査時にはマネジャーを務めていたＹ氏（50代、主婦）に対し、本稿の主旨ならびに報告の際には個人情報に留意することなどを説明し承諾を得た。その上で個々への調査を実施したが、その際にも個々に対し上記と同様の手続きをとった。

次の対象者に対し、2015年3月から2016年3月の間に調査を実施した。Ｌクラブの3.11以前からのメンバーとして上記Ｙ氏、バレーボールに特に積極的な主力メンバーＫ氏及びＨ氏（いずれも30代、既婚、店員）、結成当初からのリーダーＡ氏の長女Ｉ氏（30代、既婚、パート、隣町に在住）、それに後述するＳ氏の長女で3.11以後に加入したＮ氏（20代、独身、店員）である。また、周辺クラブとして男子バレーボールクラブ（以下「男子クラブ」と略す）のリーダーＳ氏（50代、既婚、行商）、別のママさんバレーボールクラブであるＰクラブのリーダーＭ氏（60代、主婦）である。Ｓ氏はかつて、Ｂ町のスポーツ少年団や中学校の部活動の指導にも携わった経歴を有する。なお、上記Ａ氏（50代、主婦）は津波で自宅を失い、しかも津波を目の当たりにしたこともあって精神的苦痛に苛まれていたため調査に協力して頂くことはできなかった。

上記対象者に対し、3.11以前、被災、そして3.11以後、各々の様相について時系列的に尋ねた。そうした中、特にＬクラブの復興プロセスについて厚く記述するのに重要とみられた対象者には複数回、調査を実施した。調査回数はＫ氏とＨ氏には2回（うち1回は同時）、Ｉ氏とＳ氏には3回、他の方には1回であった。調査時間は1回につき50-70分程であった。

調査を通じて、Ｌクラブは3.11から1年が過ぎた頃までに可能な限りレジリエンスを発揮して復興に至ったとみられるため、本稿ではその時点までについて取り上げる。

Ⅲ．Ｌクラブ及び周辺クラブの3.11をめぐる様相

次にＬクラブと、その復興に直接に関わった周辺クラブとして男子クラブ及びＰクラブ各々の3.11をめぐる様相について示す。それにあたり、分かり（読み）やすさに留意し、主として各様相に詳しいとみられる対象者から得られたデータを基に解説する形をとる。以下、対象者の発言をほとんどそのまま記す箇所には「　」を用いる。（　）は筆者の補足、…は中略、「　」の後の（　）内は発言者を表す。

1．3.11以前のＬクラブ及び周辺クラブの様相

Ｌクラブは1985年にＢ町で結成されたマ

マさんバレーボールクラブである。上記A氏がリーダーとなり、バレーボール（以下「バレー」と略す）の競技経験者（スポーツ少年団や中学・高校の部活動の経験者）に限らず知人を誘い合い、10人程のメンバーで活動を開始した。メンバーの年齢は、当初は20代から30代であった。仕事を持つメンバーが多く、主に土曜の午後、当初数年間はB町の某小学校体育館で、その後は3.11まで公民館内の運動場で、基本的にはレクリエーショナルな活動（普段は練習）を続けてきた。「自由で和気あいあいとした感じ」（Y氏）であったが、近隣地域で開催される種々の大会に出場し優勝することもあった。メンバーは次第に年をとり、離脱者と加入者が相次ぎ年齢幅が広がっていった。3.11当時は20代から50代までいた。そのうち、Lクラブに加入する以前の競技経験者はK氏（スポーツ少年団及び中学・高校生時代に部活動を経験）及びH氏（中学生時代に部活動を経験）であり、両者がLクラブの主力メンバーであった。ほとんど休むことなく活動に参加していたのが両者とA氏、それにI氏であり、この4人が通常のメンバーであった。他のメンバーは安定せず「たまに来る程度」（I氏）であり、全員揃えば10人程であったが普段は7、8人で活動していた。大会の際はほとんどのメンバーが揃ったと言う。

3.11当時、B町にはママさんバレーボールクラブがLクラブの他にも幾つかあった。なかでもPクラブは、Lクラブより早い時期に幼稚園児の母親仲間でM氏を中心に結成された、B町では最も活発に活動してきたクラブである。当初よりメンバーは10人程であり、長年に亘って火曜と木曜の夜にB町のC中学校体育館（以下「C中体育館」と略す）で、Lクラブとは対照的にほとんど皆が揃って本格的な活動を続けてきた。競技レベルもLクラブより上であった。C中体育館はバレーコートが2面とれるため、B町の男子クラブもそこでPクラブと同様に活動を続けてきた。Pクラブのメンバー数はほとんど増減がなかったのに対し、当初は20人近くいた男子クラブのメンバーは仕事や家庭の問題で減少傾向にあり、3.11当時は安定せず3、4人の日もあれば10人を超える日もあったと言う。そんな中で、ほとんど休むことなく活動に参加してきたのはリーダーS氏ら数人であった。

Lクラブでは3.11以前、K氏とH氏がバレーに特に積極的であった。両者は土曜だけでは飽き足りず、10年近く男子クラブの火曜と木曜の活動にも参加していた。両者ともS氏を「おんちゃん（おじさん）」と呼ぶようにS氏と親しい間柄であるが、その端緒としては中学生時代にS氏からバレーボールを教わったことが挙げられる。S氏は「（かつて両者が）練習させてくれっていうから、教えながら一緒にやってきた」と言う。男子クラブの活動は参加者が少ないことが多く、K氏とH氏が参加することで「人数的に助かる面もあった」（S氏）。両者はS氏以外のメンバーとも「長い付き合いなので気心が知れていた」（K氏）と言う。傍らで活動するPクラブのM氏は、両者を「（男子クラブと）ずっと一緒だったね」と言うように普段から目にかけていた。Pクラブと男子クラブは、その日の人数に応じて交流し、試合形式の活動を行うことも度々あった。その際にはK氏とH氏もいずれかのチームに入ってプレーしたことで、両者はPクラブとも「垣根はなかった」（K氏）と言う。また、LクラブはPクラブと練習試合を行うためにC中体育館を訪れることも度々あった。B町のバレー界について、S氏は「バリアがない…大会でも皆で協力しあってやってきたし、何かあれば協力しあえる雰囲気」と、M氏も同様に「（バレー）協会がしっかりしているから各クラブの関係もよい」と言う。

2．Lクラブの被災の様相

B町では3.11直後、ほとんどの小・中学校の体育館が避難所とされた。公民館内の運動場は、3.11によって置場がなくなったB町の様々な物資の倉庫とされ、Lクラブは活動

場所を失った。B町は津波で甚大な被害を受け、町全体が「スポーツどころでない雰囲気」（K氏）となり、Lクラブはもとよりプクラブも男子クラブも活動できる状態ではなくなった。

Lクラブのメンバーに人的被害はなかったが、リーダーA氏は津波で自宅を失い、仮設住宅が建てられる6月頃まで、家族で親戚宅や見なし仮設で過ごさざるを得なかった。津波を目の当たりにしたことで「トラウマ状態」（I氏）となり、その後もずっと3.11のことを思い出したくない心境であったと言う。また、隣町に住むI氏も津波で自宅を失った。I氏は家族と避難所で2日間過ごした後、親戚宅に1ヶ月程身を寄せ、4月下旬には見なし仮設に移った。他のメンバーの被害はライフライン（水道、電気、ガスの供給停止）ですんだ。

3.11当日、H氏はLクラブのメンバーや男子クラブのS氏の安否を懸念し、各々に繰り返し電話をかけたがほとんどつながらなかった。翌日になると、S氏に電話がつながり被害状況（後述）を知った。「気の毒で…さすがにバレーのことなんか話す場合でなかった」（H氏）と言う。K氏はちょうど隣町で、Lクラブとは別の仲間とバレーに興じていた際に地震に遭った。あまりの揺れのため、近くにある職場（飲食店）が気になった。直ぐに車で向かうと店は壊滅状態で既に閉まっていた。自宅は無事であったが、やがて職場の復旧の目途が立たず失業した。「暫く脱力状態でした」（K氏）と言う。

他方で、男子クラブで甚大な被害を受けたのはS氏であった。自宅が津波で大規模半壊し、同じ敷地にある、行商の拠点としていた小屋も壊滅状態となった。そんな中でも「納屋に入れていた（バレー）ボールは残っていた」が「暫く頭の中は家と仕事のことだけで…とてもバレーのことは思いつかなかった」（S氏）と言う。S氏は3.11から数週間、町内の妹宅で過ごした後、3.11に関わる様々な情報を得たいと思い避難所に移った。その後2ヶ月あまり、がれき撤去や泥かき、建物や設備の修繕のために自宅と避難所を往復する日々を送った。なお、Pクラブも人的被害はなく、1人の自宅が半壊した。

3．Lクラブの復興へ向けた様相

(1) Lクラブの活動再開へ向けた動き

Lクラブで3.11以後、活動再開へ向けて動いたのはK氏とH氏であった。A氏もI氏も甚大な被害に遭ったことでバレーどころではなかった。

K氏は失業し「脱力状態」となったが「バレーはしたかった」と言う。バレーを行うことで「余計なことを考えなくてすむ」と思うこともあった。その反面、甚大な被害を受けたB町で「（実際に）バレーができるとは思えなかった…家では（断水が続いたことで）毎日水汲みで生活するだけで大変」であった。4月中旬になると、小・中学校で新年度の授業が開始され、次第に町全体の雰囲気も落ち着いてきた。K氏は「やっとバレーができる…（Lクラブの）皆と会いたい…バレーをすることで自然と笑いあえるはず」と思うようになった。

H氏は小学生の子ども2人の面倒をみる日々を送った。B町では学校も習い事もずっと休みであり、幾つかの運動広場や校庭には仮設住宅の建設が進められた。子ども達は運動する（遊ぶ）場所が制限されたことで、ほとんど家で過ごすより他はなかったと言う。H氏は次第に「ストレスがたまって…早く運動したい」、またK氏と同様に「（Lクラブの）皆と会いたい…バレーがしたい」との思いに駆られるようになっていった。しかし、4月末までは家事に追われ余裕がなかった。また、「（B町は）電話がだめ」であり、Lクラブのメンバーと連絡をとることさえ容易ではなかった。

5月の連休の頃、K氏とH氏は「バレーをやりたい」「（活動を）再開することはできないの」と男子クラブのリーダーS氏に電話で伝えた。ちょうど「スーパーも開いて普通の

生活に戻った頃」（K氏）、また「家事が落ち着いたかなという時」（H氏）であったと言う。K氏は「（リーダーの）Aさんが（被災したことで）機能しない状況」でも「おんちゃん（S氏）に頼れる」と思った。H氏も同様であったが、両者は連絡を取りあったわけではなく、電話が同じ頃となったのはたまたまであったと言う。

(2) 男子クラブ及びPクラブの活動再開

S氏は自宅と小屋の復旧作業に追われ、町内の様子をあまり知らないでいた。2人からの電話には「でも体育館は使えないぞ」と返答した。とはいえ、S氏自身が「避難所で寝て食べての繰り返しでモヤモヤ」していた。「（復旧作業で）身体は動かしていても縮こまる感じ」であったため、電話を受けてからは「運動したくなった」と言う。

S氏は間もなく、C中学校に電話をかけ体育館が使用可能かを尋ねると、可能との返答であった。もとよりC中体育館は、物資置場にも避難所にもされていなかった。S氏は早速K氏らに連絡した。3.11からほぼ2ヶ月後、S氏ら男子クラブのメンバーとK氏、H氏の5人で活動を再開した。その時の様子について、H氏は「やっと始まった…皆で前と変わらず明るく楽しくできた」と、S氏は「2ヶ月動かなかったので身体が変だった」が「バレーで（身体が）伸び伸びした…皆でバレーができるんだ」との「喜び」もあったと言う。K氏は「（3.11以前も）ずっと男子と一緒にバレーをやっていた…男子とのつながりが強かったのが大きかった…女子（Lクラブ）だけだったら再開はもっと遅くなった」と振り返る。

他方で、PクラブのリーダーM氏は「学校が再開した頃にバレーも再開したいと思うようになった」。5月になると、サブリーダーと電話で連絡をとり、中旬にPクラブの食事会を開くことにした。その際はほとんどのメンバーが参加し、Pクラブの早期の活動再開に皆が賛成であったと言う。やがて男子クラブがC中体育館で活動を再開したという情報を受け、Pクラブも急遽活動を再開した。その傍らでは、男子クラブに交じってK氏とH氏も活動していた。

(3) Lクラブの活動再開から復興へ

K氏とH氏は活動を再開したが、その活動は「（L）クラブの枠ではなくて、おんちゃん（S氏）中心に木曜のメンバーが集まった感じ」（H氏）、3.11以前と同様に男子クラブの活動に両者が交じる形であった。人数は少なかったが途切れることはなかった。そんな中、K氏とH氏は火曜の活動にもほとんど参加し続けた。K氏は「相変わらず楽しかった」と言う。S氏の場合は「皆とバレーするのはストレス解消になったし震災を忘れられる時」であった。「（活動から）帰ると元（モヤモヤした状態）に戻るし今後の不安はあった」が「バレーをやってる時は身体も心もスッキリした」。

H氏はやがて、町内の仮設住宅に移ったA氏を「もうバレーやってるから、落ち着いたら来ればいいさ」と誘った。暫くすると、A氏は活動をみに来るようになった。「孫を連れて来る」（H氏）こともあったと言う。7月になると、A氏はI氏と一緒に活動に参加するようになり、Lクラブの通常のメンバーが揃った。I氏はシューズもユニホームも津波で流されたが、K氏にもらって活動した。「（身体が鈍っていて）動けなかったけど、ボールにさわれて楽しかった」と言う。

男子クラブは、活動再開後も「（メンバーの多くが）仕事や家庭で復旧作業が大変だったよう」（S氏）であり、なかなかメンバーが集まらず3、4人という日もあった。「バレーはある程度人数がいないと満足にできない」ため「（Lクラブが）一緒になって人数が増えるのはよかった」とS氏は言う。K氏らはLクラブの他のメンバーも誘い続けた。秋には「（3.11以前より）1人、2人少なかった」（I氏）が、3.11以前と同様に時折参加するメンバーが出てきた。

Lクラブは普段、男子クラブと一緒に活動していたが、メンバーが揃った際はPクラブ

と試合形式の活動を行うこともあった。両クラブは3.11以前、練習試合を度々行っていたから「自然な成り行き」（Ｉ氏）であったと言う。

冬場になると、Ｌクラブに若手が加わり活気づいた。中学生時代の部活動経験者、Ｓ氏の長女Ｎ氏である。Ｎ氏は3.11で津波被害の現場に居合わせたことで精神的苦痛に苛まれ、勤務していた会社を退職するに至った。自宅でこもりがちなＮ氏をＳ氏が見かねて活動に誘ったと言う。他方で、Ｐクラブは「高齢化のため」（M氏）に活動に参加するのは6、7人と少ない日が多くなった。そんな中、ＬクラブはＰクラブと一緒に活動することが増えていった。M氏は「人数が少なかったし（Ｌクラブがいることで）助かった…皆仲よくなっていたので問題はなかった」と言う。Ｉ氏もＰクラブと一緒に活動することで「（人数が多くて）楽しかった」。また、Ｐクラブは「年寄りが多い」（Ｋ氏）が、競技レベルは高かった。そのため「（3.11以前は）ダラダラすることが多かった」Ｌクラブは、Ｐクラブと活動することで「本当にバレーをするようになった…強くなって面白かった…活動が活発化した」（Ｉ氏）と言う。

春には3.11以後初めての地域大会が開催され、Ｌクラブも出場した。Ｐクラブは高齢化のため、夜間に活動することがきつくなり、M氏らが活動の仕方を考えるようになったと言う。やがて活動場所を隣町の体育館に移し、昼間に活動することになった。ＬクラブはＰクラブからＣ中体育館のコートを譲り受ける形で、木曜の夜に単独で活動するに至った。M氏は「（Ｌクラブと）一緒にやっていたのでバトンタッチしやすかった」と言う。その後、Ｌクラブの活動は更に活発化し、競技レベルも高まったと言う。

Ⅳ．考察

Ｌクラブは3.11で活動場所を失い、メンバー２人の自宅が津波で全壊した。人的被害に遭ったメンバーはいなかったが、Ｂ町では「学校再開まで」スポーツ活動の「自粛ムードが町に漂って」（吉田，2017，56）いた。そうしたスポーツどころではないといったＢ町の雰囲気も相俟って、暫くはＬクラブも活動を行うことはできなかった。もとより活動場所を失い、しかもリーダーら自宅を失ったメンバーがいたＬクラブが、独立的にレジリエンスを発揮して活動を再開することは極めて困難であったに違いない。しかしながら、男子クラブとの連携が可能であったことが活動再開及び持続に、Ｐクラブとの連携も可能であったことは復興に奏功したとみられる。Ｌクラブの復興プロセスは、このように２つの局面に大別することができる。次に、Ｌクラブのレジリエンスの要因について、各々の局面に分けて考察しよう。

１．男子クラブとの連携と活動再開・持続

3.11以前からＬクラブの主力メンバーＫ氏及びＨ氏のバレー欲求は非常に強固であったと言える。このことは両者が、活動再開をめぐるＨ氏の言のように「クラブの枠では」ない「木曜のメンバー」として、男子クラブに交じって10年近く活動を続けてきたことはもとより、3.11直後でさえも「バレーはしたかった」（Ｋ氏）と言うような両者の思いから明らかである。また、両者とも活動再開以前に「皆と会いたい」と思ったように、Ｌクラブへの愛着も強固であったとみてよい。さしずめ、こうしたＫ氏とＨ氏の強固なバレー欲求ならびにＬクラブへの愛着は、Ｌクラブの活動再開に至る局面におけるレジリエンスの前提と言えよう。

男子クラブに交じった両者の活動は、両者が中学生時代にＳ氏にバレーを教わり、その後もＳ氏を慕っていたことに端を発する。それは、Ｈ氏が3.11直後、Ｓ氏に安否を気遣い繰り返し電話をかけたことや、Ｋ氏がＳ氏を「おんちゃん」「頼れる」と表現することからも分かる。そして、男子クラブの傍らで

は普段からＰクラブが活動していた。M氏は男子クラブに交じって活動するＫ氏とＨ氏を「ずっと一緒だったね」と普段から目にかけており、両者はＰクラブと交流することもあり「垣根はなかった」（Ｋ氏）のである。それゆえＫ氏とＨ氏は、Ｓ氏及びＰクラブのメンバーと所謂顔の見える関係を築いていたに違いない。ただし、一言で顔の見える関係とは言え、各々とのそれには濃淡があったと言えよう。まず、この点についてみてみる。

森田ほかは緩和ケアの立場から、今日のわが国では「顔の見える関係」が医療や看護等に加え上記領域の「地域連携」という点で重視されるようになったとし（森田ほか，2012，323）、それまで検討に供されていない「顔の見える関係とは何か」について医療福祉従事者に対する調査を基に分析した。その結果、この関係は次のような３つの「幅のある意味をもって使用・理解されていることが示唆された」と言う。①「顔が分かる関係」、つまり「会ったこともない人たちの顔がとりあえず分かるようになること」。②「顔の向こう側が見える関係 (人となりが分かる関係)」、つまり「どういう考え方をする人で、どういう人となりかが分かるようになること」。③「顔を通り超えて信頼できる関係」、つまり「信頼感をもって一緒に仕事ができるようになること」（森田ほか，2012，326）。

こうした顔の見える関係の濃淡は、別段緩和ケア領域に固有のものではなく、上記③にある「仕事」を（何らかの）活動と置換すれば一般的に認められるものである。Ｋ氏とＨ氏は男子クラブのメンバーと 10 年近く活動を共に行ってきた間柄であり、Ｋ氏が「男子とのつながりが強かった」と言うことから少なくとも上記②のレベル、なかでもＳ氏を「頼れる」と慕っていたからＳ氏とは③のレベル、いずれにしても言わば濃いレベルの顔の見える関係であったとみられる。こうした関係が、Ｋ氏とＨ氏の活動再開とその後の活動に大いに活かされたのである。

Ｂ町では４月中旬に小・中学校が新年度の授業を開始し、５月の連休明けにはスポーツ活動も再開していった（吉田，2016，2017）。そうした中、Ｋ氏とＨ氏は活動を再開したいとの思いから相前後してＳ氏に電話をかけたのであるが、それが可能であったのはＳ氏とかなり濃いレベルの顔の見える関係にあったからであり、活動再開から再開後の活動に何ら支障がなかったのは男子クラブのメンバーと濃いレベルの顔の見える関係にあったからに他なるまい。

ただし、Ｋ氏とＨ氏の活動は暫く、Ｈ氏が「クラブの枠ではなく」と認識する通り（L）クラブ単位ではなく、3.11 以前と同様に両者の任意の活動であったとみるべきである。男子クラブの活動に、3.11 以前と異なりＬクラブの他のメンバーも参加するようになったのは７月であった。つまり、Ａ氏やＩ氏といった通常のメンバーが揃ったのはこの時期であり、そこから正しくＬクラブと男子クラブとの連携の局面に入ったとみられる。換言すれば、Ｌクラブは男子クラブとの連携を通じて活動を再開し、持続するに至ったのである。「バレーはある程度人数がいないと満足にできない」「人数が増えるのはよかった」とＳ氏が言うように、男子クラブの参加者が少なかったこともＬクラブにとってみれば大きかった。一方で、男子クラブにおいても、Ｌクラブと連携をとることは人数の面で好都合であり歓迎であった。その後Ｌクラブは、上記以外のメンバーも時折参加するようになり、活動が軌道に乗っていったとみられる。

かくしてＬクラブはレジリエンスを発揮し、男子クラブとの連携を通じて失った活動場所を別のところで一先ず得、活動を再開し持続するに至った。この局面では、Ｋ氏及びＨ氏がＬクラブのレジリエンスの担い手であることは明白であるが、キーとなったのは男子クラブとの連携である。その意味でレジリエンスのキーも、言わば連携力（連携をおし進める力）とみてよい。その要因としては、3.11 以前に築かれた両者と男子クラブＳ氏とのかなり濃いレベルの顔の見える関係に加え、他

のメンバーとの濃いレベルのそれが挙げられる。また、両者の強固なバレー欲求とＬクラブへの愛着も、レジリエンスの前提とも言うべき要因とみられる。なお、男子クラブの人数不足も連携の要因と言えようが、これはＬクラブのレジリエンスの及ぶ範囲ではない。

２．Ｐクラブとの連携と復興

Ｌクラブは男子クラブとの連携を通じて活動を再開し、持続することができたが、この時点では言わば仮住まいの状態に留まっていた。そうした不安定な状態で復興に至ったとは言えまい。次に、Ｌクラブの復興に至るプロセスについてみていこう。

Ｋ氏とＨ氏は 3.11 以前、上述の通りＰクラブのメンバーとの顔の見える関係も築いていたとみてよい。ただし、両者は基本的に男子クラブに交じって活動を続けていたのであり、この関係はＳ氏ら男子クラブのメンバーとのそれと比すれば薄く、上記①程度のレベルであったと考えるのが妥当である。それが濃いレベルであったなら、そもそも両者はＰクラブに交じって活動再開に至ってもよかったはずである。また 3.11 以前、Ｌクラブは Ｐクラブと練習試合を行うことが度々あったから、Ｋ氏とＨ氏以外のメンバーも濃淡は別として、Ｐクラブのメンバーと顔の見える関係を築いていたとみられる。こうした関係があったからこそ、Ｌクラブは活動再開後、メンバーが揃った際にはＰクラブと試合形式の活動を「自然」（Ｉ氏）に行うに至ったのであろう。両クラブのメンバーは共に活動する回数を重ねるにつれ、顔の見える関係を濃化していったに違いない。

冬場になると、Ｐクラブは高齢化の影響で参加者が 6、7 人と減った。メンバーが不足しがちなＰクラブにとって、活動を充実させるためにはＬクラブが救世主のごとき存在となり、明確に両クラブの連携の局面に入ったとみられる。「皆仲よくなっていたので」とＭ氏が言うように、両クラブのメンバー間の顔の見える関係が濃化していったことで連携に支障はなかった。ＬクラブはＰクラブと連携することで、Ｉ氏が言うように「（人数が多くて）楽しかった」のであり「本当にバレーをするようになった」。3.11 以前よりも「活動が活発化した」のである。春になると、ＬクラブはＰクラブからコートを譲り受けた。Ｐクラブの高齢化による面はあるが、ＬクラブがＰクラブと「一緒にやっていた」（Ｍ氏）、つまり連携して活動していたことが大きかったのは確かである。かくしてＬクラブは独立的、安定的に活動を行うことが可能となり復興に至ったとみられる。

Ｌクラブのこうした復興の局面でも、Ｐクラブとの連携がキーであり、レジリエンスのキーも連携力ということになる。その要因に挙げられるのは、3.11 以前に築かれたＬクラブとＰクラブ各々のメンバー間の顔の見える関係の 3.11 以後における濃化である。Ｐクラブの高齢化や人数不足も連携に影響を及ぼしたが、それらはＬクラブのレジリエンスの及ぶ範囲ではない。

前述した森田ほかは、顔の見える関係は「地域連携が良いことを構成する要素の１つであり、単に相手の名前と顔が分かることではなく、安心して連絡しやすくなる、役割を果たせるキーパーソンが分かる」ことなどを通じて「連携を円滑にする機能」を有すると、この関係により「連携しやすくなる」と指摘する（森田ほか，2012，327-328）。Ｌクラブの活動再開の担い手、換言すればレジリエンスの担い手となったのはＫ氏及びＨ氏であるが、正しく両者は男子クラブのメンバー、とりわけＳ氏とのかなり濃いレベルの顔の見える関係を築いていたことで、Ｌクラブと男子クラブとの連携に寄与し得た。延いてはＬクラブとＰクラブのメンバー間の濃化した顔の見える関係が、両クラブの連携に奏功したのである。

冒頭で述べたように、先行研究（吉田，2016，2017）では各クラブのレジリエンスの源泉ないし要因としてスタッフの心情的側面が捉えられた。ただし、総合型地域スポーツ

クラブについては「B町の各施設と大震災前から良好な関係性を築いていたことが会場確保に奏功した」（吉田，2016，539）とあるように、当該クラブの復興に地域施設との連携が有用であったとの知見も得られた。それに対し、本稿の知見は、当該クラブの復興に他クラブとの連携が有用であったというものであり新規性を有すると言える。

V．おわりに

3.11 で被災したママさんバレーボールＬクラブの復興プロセス、とりわけＬクラブがレジリエンスを発揮し得た要因について解明することを試みた。3.11 被災地の復興について議論する大森は「仮設商店街の活気は、商店主たちの連帯感」等で「形づくられて」おり「『人のつながり』を基盤とした復興への歩み」がみられると指摘する（大森，2016，102）。蓋しＬクラブの復興プロセスも、人のつながりとも言うべき顔の見える関係を抜きに語ることはできない。本稿の知見をまとめると、概して次のようになる。

Ｌクラブの復興プロセスは２つの局面に大別され、いずれの局面でも各クラブとの連携がキーであった。それゆえ、レジリエンスのキーも連携力（連携をおし進める力）となるが、その要因はまず、活動再開と持続に至る局面では、3.11 以前に築かれた主力メンバー（2 人）と男子クラブリーダーとのかなり濃いレベルの顔の見える関係に加え、他のメンバーとの濃いレベルのそれとみられた。次なる復興に至る局面では、3.11 以前に築かれたＬクラブとＰクラブ各々のメンバー間の顔の見える関係の濃化とみられた。また、前者の局面では、上記主力メンバーの強固なバレー欲求とＬクラブへの愛着もレジリエンスの前提的な要因とみられた。

わが国では昨今、スポーツの一層の発展のために、スポーツ領域における連携やスポーツ領域と他領域との連携を進めていくことが国家レベルで重視されている[4)]。他方で官民連携、産学連携、住民連携等、様々な領域や個人の間の連携の有用性が着目されている。今やあらゆる面で連携の力（効用）は自明とも言えようが、本稿では被災した地域スポーツクラブの復興に他クラブとの連携が有用であったという学術的に新規性を有する知見、しかも連携に留まらず、それを可能としたのは顔の見える関係であったという一歩踏み込んだ知見が得られた[5)]。この関係は社会学の文脈でみれば、社会関係資本[6)]の範疇で捉えることも可能であろうが、ともかく本稿の知見から、地域スポーツクラブはレジリエンス向上、換言すれば災害復興や防災減災、また持続のために、普段から他クラブと連携するにこしたことはないが、少なくともメンバー間で顔の見える関係、しかも可能な限り濃いレベルで築いておくことが有用であることが指摘される。

今後の課題としては主に、3.11 で被災した地域スポーツクラブの復興及びレジリエンスの全容解明へ向けて対象クラブを増やしていくことはもとより、他の大災害にも射程を拡大し同様の研究を展開していくことが挙げられる。

付記：本研究は JSPS 科研費 26350797 の助成を受けたものである。

【注】

1）一般社会学では『東日本大震災と社会学』（田中ほか編著，2013）や『3.11 以前の社会学』（荻野・蘭編著，2014）をはじめ、早い時期からまとまった研究成果が着々と著されてきた。

2）3.11 メモリアルネットワークの震災伝承活動はその代表的なものとみられる（3.11 メモリアルネットワークを参照）。また、それをサポートする公益社団法人 3.11 みらいサポートは、早くから語り部活動に取り

組んできた（公益社団法人 3.11 みらいサポートを参照）。

3）わが国では3.11 以降も災害が後を絶たない。3.11 に限らず各災害におけるスポーツ界の現実について検討を加えていくことも重要と言えよう。

4）中央教育審議会（2012）、スポーツ審議会（2018）、ならびに日本スポーツ協会（2018）を参照されたい。

5）筆者は従来、3.11 をめぐる様々なシンポジウムや活動報告会に参加し、また展示会や企画展等の視察を重ねてきた。そうした中、諸々の連携が防災減災や災害復興のために有用であるということを度々耳に（目に）してきた。最近（2020 年 2 月）視察した企画展「3.11 現場の真実×心の真実　世界がすこやかであるために～東日本大震災と保健活動～」（於：せんだい 3.11 メモリアル交流館、2020 年 2 月 22 日～ 6 月 28 日）の展示パネルでも、保健師の視点からみた、防災減災や災害復興における諸々の組織や個人の「連携」ならびに「顔の見える関係」の重要性が記されており、本稿に対しても示唆的であった。

6）社会関係資本は社会学をはじめ様々な領域で検討に供されており、定義も一様ではないが（埴淵，2018，14–16）、これについて掘り下げる稲葉によれば「広義でみれば『社会における信頼・規範・ネットワーク』を含んでおり、平たく言えば、信頼、『情けは人の為ならず』『持ちつ持たれつ』『お互い様』といった互酬性の規範、そして人やグループの間の絆を意味している」（稲葉，2011，3）。

【文献】

地星社，2019，『宮城県被災地・地域づくり白書 2019』，特定非営利活動法人地星社.

中央教育審議会，2012，「スポーツ基本計画の策定について（答申）」. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1319060.htm（参照日 2020 年 2 月 26 日）.

藤本宏美・犬飼義秀，2012，「地域におけるスポーツ復興支援活動」，『スポーツ産業学研究』22（1），219–226.

埴淵知哉，2018，「社会関係資本論の研究動向」，埴淵知哉編『社会関係資本の地域分析』，ナカニシヤ，3–16.

稲葉陽二，2011，「ソーシャル・キャピタルとは」，稲葉陽二・大守　隆・近藤克則・宮田加久子・矢野　聡・吉野諒三編『ソーシャル・キャピタルのフロンティア―その到達点と可能性―』，ミネルヴァ書房，1–9.

加藤清孝，2012，「スノーアスリートたちによる被災者支援」，『スポーツ産業学研究』22（1），227–235.

公益社団法人 3.11 みらいサポート，「伝承を支える」. https://311support.com/assist（参照日 2020 年 2 月 28 日）

黒須　充，2011，「総合型地域スポーツクラブにおける被災地支援活動」，『福島大学研究年報』別冊，179–185.

松井克浩，2008，『中越地震の記憶』，高志書院.

森田達也・野末よし子・井村千鶴，2012，「地域緩和ケアにおける『顔の見える関係』とは何か？」，“Palliative Care Research” 7（1），323–333.

中村祐司，2016，『スポーツと震災復興』，成文堂.

日本学術会議，2014，『災害に対するレジリエンスの向上に向けて』，日本学術会議 東日本大震災復興支援委員会災害に対するレジリエンスの構築分科会.

日本スポーツ協会，2018，「スポーツと、望む未来へ」. https://www.japansports.or.jp/about/brand/tabid1174.html（参照日 2020 年 2 月 26 日）

荻野昌弘・蘭　信三編著，2014，『3.11 以前の社会学』，生活書院.

大森美紀彦，2016，『《被災世代》へのメッセージ』，新評論.

齊藤恵理称・中村好男，2012，「東日本大震災後のスポーツ業界の復興支援活動の実態と

活動が与えた影響」,『スポーツ産業学研究』22（1），209–214.
齊藤和貴・岡安孝弘，2009,「最近のレジリエンス研究の動向と課題」,『明治大学心理社会学研究』4，72–84.
3.11 メモリアルネットワーク,「3.11 メモリアルネットワークについて」. https://311mn.org/convey（参照日 2020 年 2 月 28 日）
スポーツ審議会，2018,「第 2 期スポーツ基本計画について（答申）」. https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/03/01/1382789_003_1.pdf（参照日 2020 年 2 月 26 日）
田中重好・舩橋晴俊・正村俊之編著，2013,『東日本大震災と社会学』，ミネルヴァ書房.
吉田　毅，2012,「東日本大震災で被災したスポーツ集団の復興プロセス―被災の様相と復興への力―」,『スポーツ社会学研究』20（1），5–19.
吉田　毅，2016,「東日本大震災で被災した総合型地域スポーツクラブのレジリエンスに関する社会学的研究―地域スポーツ論への一視角―」,『体育の科学』66（7），535–540.
吉田　毅，2017,「東日本大震災被災地におけるスポーツ少年団のレジリエンスの要因」,『桐蔭論叢』37，51–59.